

## シェイクスピアの歴史劇第二・四部作

### ——理想的君主像——

佐 竹 竜 照

一  
一五九五年から一五九九年の僅か数年間がイギリスにおける歴史劇の頂天と呼ぶことができる。この数年間にシェイクスピアは「リチャード二世」(Richard II)から「ヘンリー四世(第一部・第二部) (Henry IV: Part I, Part II) および「ヘンリー五世」(Henry V)の四大歴史劇を完成させている。この四大歴史劇は各々独立した劇作品であることは言うまでもないが、一連の劇的構想のもとに統合された四部作ともいえるものである。

「リチャード二世」は一五九五年かまたはその翌年の一五九六年に書かれており、「ヘンリー四世」(第一部・第二部)は一五九六年から一五九七年に、また「ヘンリー五世」はその二、三年後の一五九九年頃に書き上げられている。

この四部作に描き出されている時代背景はテューダー王朝前半期に当り、いわゆるバラ戦争を中心とする時代である。そこでは旧制度が崩壊し、テューダー王朝の成立によってはじめて新制度が確立するという歴史的転換を示す時代であった。シェイクスピアがこの四部作を執筆するにあたって、その当時多くの人々に親しまれていたという数冊の史書を参照していたことは明らかである。エドワード・ホルの史書「ランカスター・ヨーク両名家の合体」(Edward Hall: ? ~ 1547, The Union of the Two Noble and illustre Families of Lancaster and Yorke: 1548)やラファイエル・ホリンシェッドによって編集された「スコットランドおよびアイルランドを含むイギリス史」(Raphael Holinshed: ?

~1580?, The Chronicles of England, Scotland and Ireland: 1577) などの史書が絶えずシェイクスピアの手にあつたことは多くの学者によって述べられてきた。シェイクスピアの四部作はホールの説く「テューダー神話」という総合的な構成組織内において描かれた劇作品であると評する学者もいる<sup>(2)</sup>。たしかにホールの史書に深く影響されていることは事実であるが、それだけでは決してなく、ホリンシェットの史書やその他の史書からも多くを学び取っていたに相違ないのである。とくにホリンシェットの史書はホールの史書と同様に、シェイクスピアに深い影響を与えた史書であつた。そしてまたブラックが示しているように、シェイクスピアが「リチャード二世」を執筆するにあつて、少なくとも七種類の史書を読んでいたと言われている。ホールやホリンシェットの史書の他に、フロアサール(Froissart)の「リチャード二世退位―反逆と死―に関する年代記」(Chronique de la Traison et Mort de Richard Deux Roy Dengleterre)、ジャン・クントン(Jean Creton)の「リチャード二世伝」(Histoire de Roy d'angleterre Richard II)および匿名の劇作品「ウッドストック」(Woodstock)、サミュエル・ダニエル(Samuel Daniel)の「イギリス内乱史」(Civil Wars)なども挙げることができる。

また「ヘンリー四世(第一部・第二部)」や「ヘンリー五世」は「ヘンリー五世の大勝利」(The Famous Victories of Henry V)に負うところも大きい。またジョン・ヘイワード(John Hayward)の「ヘンリー四世の生活と主権」(Life and Raigne of King Henrie IIII)なども参考にしていただと思われる。ヘイワードの史書はシェイクスピアの「ヘンリー四世(第一部・第二部)」が完成した年(一五九九年)に出版されているために、多分シェイクスピアはヘイワードからその原稿を見せてもらったものであろうとも言われている。いずれにしてもシェイクスピアがこの四部作を執筆するにあたって、数多くの史書を参照したことは以上のところからみても明らかであろう。数多くの史書を参照するという態度は歴史を取り扱うという制約された歴史劇の性格にもよるが、それ以上に歴史劇をより客観的に描き出そうとするシェイクスピアの芸術的態度と言った方が正しいといえる。

またシェイクスピアの四部作はイギリスの歴史劇を詩としても、また劇としても最高度に近い発展成果として評価することもできるのである。そこにはさまざまな劇作家による多くの歴史劇の集積があつたからである。数多くの史書と同様に、数多くの歴史劇がシェイクスピアに与えた影響は実に大きい。シェイクスピアは「リチャード二世」において、マールロウ(Christopher Marlowe)の歴史劇「エドワード二世」(Edward II: 1533)が示している「歴史悲劇」の型を等しく用いており、また「ウッドストック」(Woodstocke)にみられる道徳劇の劇構造も取り入れ

てもいる。「ヘンリー四世(第一部・第二部)」では「エドワード三世」(Edward III)の最も重要である主題の「教育」という劇的主題を取り入れ、より以上の劇的效果をおさめてもいる。また「ヘンリー五世の大勝利」から暗示を得て、喜劇的人物であるフォールスターフ像を造型している。このフォールスターフは「ヘンリー四世(第一部・第二部)」における主要な登場人物で、道徳の様式の最もすばらしい性格の一つである。シェイクスピアがこの「ヘンリー五世の大勝利」を読んでいなかったとしたら、恐らくフォールスターフという喜劇的大人物は生れなかったかも知れない。また「ヘンリー五世」にみられる英雄的性格はマローウの「タンバレイン大王」(Tamburlaine the Great: I. II: 1560)がその最も重要な原型となっている。以上のようなさまざまな影響のもとに完成されたシェイクスピアの四部作は、イギリスにおける歴史劇の代表作であるばかりか、歴史劇の頂点を示すものといえるのである。

## 一一

「リチャード二世」(Richard II)はシェイクスピアの成功した最初の歴史劇であると同時に、性格悲劇としても成功している劇作品である。「リチャード二世」では国王リチャードが政治的事件に対処する手腕に欠けているため、彼自ら破滅を招く結果となるのであるが、その破滅には観客の同情をかき立てるものがある。その理由は先ず第一にリチャード二世の個人的関係にある。すなわち彼の友人や妻などに対する彼の美徳はかなり鮮明に描き出されている点にある。しかし政治を取り扱うリチャード二世の態度には明らかに違犯が感じられる。彼は側近の諂う重臣たちに乗ぜられ、マローウの「エドワード二世」のようにリチャード二世個人の快楽のために国家を犠牲にしてしまうからである。シェイクスピアはマローウからその性格の類似性を学び取ったのかも知れない。その類似性とは「エドワード二世」におけるエドワードとモテイマーの関係が示すように、リチャードとボリングブロックの関係である。一方が栄光の座へ上るのに対して、他方はその栄光の座から退くという両者の関係が明示されているからである。第二に注目すべき重要な点は苦悩しているリチャードには、マローウの「エドワード二世」にみられるよりはるかに自分自身を、すなわち国王としての自分と、一人の人間としての自分をもう一度冷静に見詰めようとする態度が感じられる点にある。またリチャード二世の死については悲劇的な発展のなにかが感じ取れるほどである。

またリチャード二世の破滅は、「ウッドストック」を想い起す道徳的考案で設定されているというところにも注目しなければならない。一例

を示すならば、イギリス国王としてのリチャードは一方のゴウントのジョンと他方のブッシー・バゴット、グリーンという両者の間にあって翻弄させられる。ゴウントはリチャード二世に対して国王としての権利と義務へ眼を向けさせようとしているが、他方のブッシー・バゴットおよびグリーンたちはリチャード二世を破滅へ誘い込もうとしている。そしてさらにゴウントの病死によって悪の力はますます激しさを加え、リチャード二世は徐々にその悪の力に屈して破滅に向う。リチャード二世は自ら引き起した退位という罪によって苦悩しなければならないのであるが、しかし彼の心にはその苦悩に耐え忍ぶというストイックな態度も感じられるし、また退位してはじめて王座というものの真の意味を認識し得たようにも感じられるからである。

以上のような道徳的パターンはヘンリー・ボリングブロック（ヘンリー四世）によって展開されていくのであるが、彼のイギリス統治は徐々に回復されてゆき、ついにヘンリー五世によって完全に成し遂げられるのである。この偉大な業績はボリングブロック自身によって成し遂げられることはできない。なぜならば彼は有能な政治的手腕を持っているけれども、彼はもともと篡奪者であり、謀叛人でもあるからである。彼は政治的混乱から秩序へ方向づけをはじめが、秩序回復は彼の息子ヘンリー五世によって行なわれることになるのである。

エリザベス時代にはリチャード二世からヘンリー五世までの歴史をコンヴェンショナルな態度、すなわちテューダー政体としての立場で解釈していたといわれているが、この立場からみれば、リチャード二世の退位はやがてバラ戦争を引き起す最も罪深い根源とみなされることになる。これはホリドール・ヴァージルからホリンシェッドまでの史書に反映されている彼等の歴史に対する態度である。テューダー政体においては国王が専制君主であろうとなかろうとそのことに問題があるのではなく、国王とは地上における神の代理者であるということに重大な意義がある。そこでは神のみが国王を退位させることができるのであって、他には誰も国王を退位させることは許されていない。反逆は如何なる原因があるにせよ、最悪の罪であり、健全な社会では「位階」(hierarchy)と「秩序」(order)が守られていなければならないのである。<sup>(5)</sup> 全国民は各々自己の位置を固守し、社会的組織においては自己の本来の機能を行使することにある。テューダー・モラリストたちはリチャード二世の退位とそれによって引き起されたさまざまな事件を歴史の実例として、無秩序化された国家に対しては神罰がその国民に災難を負わせるのだと解釈したのである。一般に受け入れられていたこの理念はシェイクスピアも認めており、専制政治とそれを支えているテューダーイズムを受け入れていたことも明らかなことである。だからと言って、シェイクスピアが当時の政治体制を宣伝するために四大史劇を書いたのではない。テュー

ードイズムという理念のみによって、シェイクスピアの歴史劇を見ようとすることは不完全といわなければならない。なぜならばシェイクスピアの歴史劇にあらわれているさまざまな要素を不明瞭にしてしまうからである。事実シェイクスピアの四部作には別の諸問題が数多く含まれている。エリザベス時代の観客たちは少なくともこれらの劇作品には正統なテューダーイズム以外のものがあることを感知していたように思われる。カンパベルによれば、「リチャード二世」における政治上の問題は国王リチャードの退位のそれであると述べている。そしてリチャード二世に示された諸問題はそのままエリザベス女王に提示された諸問題と類似するものであり、シェイクスピアの主な政治的意図は確立されたテューダー理念を肯定することであり、問題は如何なるものであろうとも、ただ神のみが国王を制定すべきものであるという解釈、すなわち四幕一場（一一四—四九）のカァーライル僧正の言葉が示すように、この原理が軽視されたときに必然的に生じてくるものを例証しているのだとも述べている。この理念が「リチャード二世」に示されていることは明白であるが、しかしこの戯曲にはテューダーイズムの一般的な道徳観以上のものが含まれているのである。シェイクスピアが「リチャード二世」を執筆する際、作者にとってリチャード二世の退位は歴史的事実として罪深いものであり、ついにはバラ戦争を引き起した結果とも感じられたことはたしかであつたろう。このバラ戦争に関してはホリンシェットの史書を参照して、シェイクスピアはカァーライル僧正に伝統的な表現方法を述べさせてもいる。このことは直接的効果としてイギリスにとって好ましいことであつたかも知れない。貧弱な無能君主を強剛で、しかも有能な君主に置き換えるということである。

リチャード二世とボォリングブロックとの争闘において、シェイクスピアが先ず第一に意図していることは有能な君主とは何か、理想的君主とは如何なる資質を有していなければならないかということであり、そしてこの大主題を「ヘンリー四世（第一部・第二部）」において展開しようとしているのである。リチャード二世の退位は明らかに違犯である。そしてその退位のためにボォリングブロックは国王として不完全と判断されなければならない理由として、シェイクスピアは両者を相対立者として描いている。リチャード二世を立法君主とし、ボォリングブロックを篡奪者としていることである。しかしシェイクスピアは「リチャード三世」において用いたように、篡奪という主題を劇的考案の媒介によって緩和されていることも事実である。すなわちリチャード三世の廃位を正当化し、同時にリッチモンド伯から反逆者という汚名を取り去ろうとしている作者の態度を思い浮かべることが必要である。

恐らく一五九九年頃、エリザベス時代の人々にとって最も重大関心事は王位継承者の問題であつたであらう。エリザベス女王にはまだ王位継

承者が決っていなかった。未決定の場合に引き起される問題とは一体何か。かりに無能君主が後継者と決った場合にはどうなるか。秩序と無秩序は何によって起るのか。無能君主による国家体制では貴族間に陰謀と謀叛の渦が巻き起り、国内に騒乱を引き起す結果となる。こうした状況を最も恐れていたのはエリザベス時代の国民であった。すでにバラ戦争によって引き起された国内騒乱から察して、彼等は等しく不安を感じていたのである。シェイクスピアが「リチャード二世」から「ヘンリー五世」までの四部作を執筆したのも、これらの状況下においてであった。シェイクスピアが四部作において展開しようとしたのはさまざまな君主像を描き出すことであり、とくに理想君主の資質を示すことに最大の関心があったと考えられる。

「リチャード二世」におけるリチャードとボリングブロックに対して、シェイクスピアは全く相反する二つの君主像を描き出し、両者を客観的に対比することによって君主はどうあるべきか、どうあってはならぬか、という概念を形成することが主な意図であった。したがってリチャード二世の破滅に対して、シェイクスピアは無能君主がその国に対して如何なる災難をもたらすかということを描き出している。ボリングブロック政權に対しては、よく統治するに必要な政治的手腕を有する君主でも、個人的道德観の欠如がある場合には、決して十分な君主にはなりえないということを示している。またヘンリー五世によるランカスター家の決定的大勝利に対して、シェイクスピアの意図はヘンリー四世（ボリングブロック）の政治的手腕が彼の息子に受け継がれ、息子のハル王子（ヘンリー五世）は個人的道德観の欠如がないために内乱の無秩序を回復し、またフランスとの戦いにおいてはイギリスを大勝利に導くこともできたのである。

しかしシェイクスピアが歴史劇において、君主の政治的役割のみに彼の関心を限定しているのではない。シェイクスピアの関心はつねに人間として把握することにあった。政治的役割は人間の単なる一部の機能に過ぎないものである。シェイクスピアの政治哲学の根本は、善人のみが良い君主になることができるというアリストテレスの政治学に基づくものであり、さらに良い君主とは国家の秩序のために、その必要性を強調すべきであるというところにある。その秩序とは国王も国民も共に協力し、各々の義務、責任を認め合うときに生れ出るものなのである。シェイクスピアの歴史劇は当時の政治的宣伝のために書かれたものではなく、他の作品（喜劇・悲劇）にもみられるように、人間関係の深い倫理的観の表白が主であったといえる。

リチャード二世とボリングブロックは二つの相對立する人生態度の象徴とも感じられる。リチャード二世の人生觀は衰退してゆく中世的世界の縮図であるとするならば、他方のボリングブロックは正反對に新しい人生態度を表明している新時代の子であるといえるかも知れない。またシェイクスピアの歴史劇にはルネッサンス時代における相對立する二つの世界觀、すなわち中世から受け継がれてきたキリスト教的理想主義と新懷疑主義の烈しい激突が反映されているともいえる。マキアヴェリの「君主論」(The Prince)が示すように、ボリングブロックは世俗的な意味での新しいルネッサンス的君主の特徴を有した君主といえるかも知れない。しかしマキアヴェリにはシェイクスピアが描いているような個と公を合せもつ美德は示されていない。シェイクスピアにとって理想的君主は、先づ第一に善人でなければならなかった。もちろん政治の現実的問題に関する限りでは、シェイクスピアもマキアヴェリが主張している君主像と異っていない。そこには公的資格を有する統治者というものが意識されていることは言うまでもないことである。

シェイクスピアはリチャード二世とボリングブロックの對照的な性格描写だけでなく、合せて両者の政治的手腕についても對照的に描き出している。リチャード二世が人間としてボリングブロックより優れているとすれば、ボリングブロックはリチャード二世よりも国王として優れている。権力のある貴族間の不和を統御するには有能な君主でなければならない。手腕のないリチャード二世の無能力が破滅への一原因となつてゆくのは明らかなことである。これに反してボリングブロックは時の情勢を巧みに対処することのできる政治家である。両者をみた場合、政治的分別と政治的決断の有無がはっきりとした對照をなして描き出されてゆくのである。

政治的問題についてボリングブロックの有能さを、また同時に反逆の提唱者と思われぬように描き出すことはシェイクスピアにとって困難な問題であつたに相違ない。しかしこの問題を解決する試みとして、シェイクスピアは「リチャード二世」の重要な一要素であるリチャード二世の個人的な悲劇を發展させたように思えるのである。この劇のリチャード二世は篡奪者の犠牲というよりはむしろ彼自身を破滅させた立案者のように考えられるからである。退位についての問題を第一に提出したのは他ならぬリチャード自身であり、争闘することもなくボリングブロックに屈服すること、また神聖な神の代理者としての国王という職権を放棄したことなどは疑いもなく違犯と言わなければならない。神の

大調和の秩序を最初に犯したのはボォリングブロックではなくリチャード二世であり、なによりも先ずリチャード二世は「時の次第、時の連続」(fair sequence and succession)という神聖な理を犯しているのである。リチャード自身退位するというこの主題は次の一節「退位の場」においてとくに強調されているといえよう。

Now mark me, how I will undo myself; I give this heavy weight from off my head  
And this unwieldy sceptre from my hand,  
The pride of kingly sway from out my heart; With mine own tears I wash away my balm,  
With mine own hands I give away  
my crown, With mine own tongue deny my sacred state, With mine own breath release all duteous oaths:  
All pomp and majesty I do forswear. (IV. i, 203~11)

テューダー史学においては、リチャード二世は王族の殉教者として描かれているけれども、戯曲「リチャード二世」としては異っている。リチャード二世は殉教者ではなく、自らを退位させ、自らを破滅に導いた。しかし他方のボォリングブロックは有能であり、王権への第一歩を着実に踏み出している。シェイクスピアは「リチャード三世」(Richard III)において示したように、反逆の主題を「リチャード二世」においても用いている。しかし「リチャード二世」におけるボォリングブロックは消極的な意味での運命の手先となっているだけにすぎない。リチャード二世の退位は劇的にはボォリングブロックの対立者というよりはむしろ自分自身の性格の結果から生じたものといえる。次の一節はそのことを明瞭に物語っている。

Though then, God knows, I had no such intent, But that necessity so bow'd the state  
That I and greatness were compell'd to  
kiss. (III. i, 72~74)

リチャード二世の破滅は彼の行為がもたらした結果によるものであるということとは、この劇についての確かな政治的教訓の一つであった。リチャード二世の罪は単に虚栄、気まぐれ、統治力の無能さばかりによるものではない。彼は自分の叔父であるウッドストックをも殺害しているのである。この事件は歴史的物語の一部として、匿名の劇作品「ウッドストック」(Woodstock)にすでに示されている。リチャード二世の犯したこの罪を知ることなしに、「リチャード二世」の初幕を理解することは困難といえる。先ずボォリングブロックは殺害された王族のために、復讐者として登場するのである。



Which blood, like sacrificing Abel's, cries, Even from the tongueless caverns of the earth, To me for justice and rough chastisement. (I. i, 104~6)

この点に関して、ボォリングブロックは「リチャード三世」に類似しているようにも感じられる。国家の悪を根絶するために、神の代理者として現われるときのリッチモンド伯の姿に似ている。事実ボォリングブロックは悪を清める役割として現われ、殺害された叔父の復讐者として、同時に混乱している国内に秩序と安定を回復させる役割をも果しているのである。

正統的な立場からみれば、リチャード二世は神聖な国王ということになる。確かにリチャード二世自身もテューダー絶対主義の根本原理を強調するのである。しかしあくまでも彼自身の行為を正当化するための自己弁明であり、自分自身を敵から守るための自己保全にすぎない。その最もよい例は次の一節から感じとることができるであろう。

Not all the water in the rough rude sea Can wash the balm off from an anointed king. The breath of worldly men cannot depose The deputy elected by the Lord, For every man that Bolingbroke hath press'd To lift shrewd steel against our golden crown, God for his Richard hath in heavenly pay A glorious angel; then, if angels fight, Weak men must fall, for heaven still guards the right. (III. ii, 54~62)

このテューダーイズムの政治理念を主張するリチャード二世には、感傷的なアイロニーすら感じられるのである。この声明が少しも観客に対して確信させることができないというのも、国王の無益な抗議のためであり、また無益な抗議となってしまうのも、国王がその理念を保持し得るに必要な人間的努力をしていないからでもある。この「三幕二場」にみられる劇的衝撃はテューダーイズムの勝ち誇っていた声明では決してない。そこにあるのはテューダーイズムのセンチメンタリズムだけである。ルネッサンス時代における権力政治という激しい現実において、神慮のみによる国家体制では意味がない。国王の政治に対する姿勢が問題なのである。リチャード二世には現実に対処し得る行動力が欠如していたのである。ボォリングブロックのような行動への積極性が欠けていた。シェイクスピアは無能力な君主の政治的失敗の実例を「リチャード二世」において描き出したのである。そしてそこに当然予想されるものは理想君主の姿である。「ヘンリー四世(第一部・第二部)」(Henry IV. Part I, Part II)はその理想君主のあり方を問う戯曲である。理想君主としてのハル王子の生成過程が「ヘンリー四世」劇における重要な主題

となってくるのである。

## 四

「ヘンリー四世」(第一部)において、シェイクスピアは先ず最初に正統でない国王ヘンリー四世の姿から描きはじめる。エリザベス時代の人々からみれば、ヘンリー四世は相続権の承認を受けていないばかりか、「リチャード二世」におけるリチャードと同様に反逆という難問に直面するのである。しかしヘンリー四世はリチャードに欠けている公徳心を有しており、相続権の正統性は疑わしいけれども、公徳心が彼を有能な国王に仕立てているのである。

「リチャード二世」の終幕において、シェイクスピアはリチャード二世とボリングブロックの両者を相対立する二つの行動として対照させているが、「ヘンリー四世」(第一部)になると、その対照法は極めて大規模となってくる。パーシンの反逆はとりもなおさず国王失脚のそれであった。またヘンリー四世は合法法の国王でもある。そして他方のモティーマ伯(Edmund Mortimer, Earl of March)は相続権を有する立場にいる。なぜならばモティーマ伯は合法的にリチャード二世によって指名された後継者であるからである。ヘンリー四世に対する反逆がリチャード二世の名のもとに持続されていることは明らかである。観客はどのような方法でヘンリー四世(ボリングブロック)が王冠を得たかは忘れていない。ヘンリー四世の生活をおびやかすものはリチャード二世殺害という罪の意識であった。勝利を得た後においても、彼には真の憩がない。しかしヘンリー四世の統治はのために非難さるべきものではないとシェイクスピアは述べている。ヘンリー四世はリチャード二世の後を受け継ぐわけであるが、秩序回復に努力する彼の態度は合法法の王位に対する償いとして描き出されているからである。臨終に際して、ヘンリー四世が篡奪について語るとき、王子ハルは次のように述べるのである。

My gracious liege, You won it, wore it, kept it, gave it me; Then plain and right must my possession be, Which I with more than with a common pain 'Gainst all the world will rightfully maintain. (IV, V. 221~5)

ヘンリー四世の王冠保持と国内平和への推進はハル王子(ヘンリー五世)に受け継がれるのである。したがって四部作の最後の作品である「ヘンリー五世」においては、あらゆるキリスト教国王の亀鑑として、その美德の成果を示そうとするシェイクスピアの意図があったのである。

る。ヘンリー五世をイギリスの最も偉大な国王たらしめた資質は、父王ヘンリー四世から受け継いだ公徳心であった。「ヘンリー五世」におけるケンブリッジ伯(Earl of Cambridge)の反逆は、ヘンリー五世にとって、以前父王ヘンリー四世が直面した問題と全く同じものであった。この反逆はかつてヘンリー四世がオーマール公(Duke of Aumerle)やパーシ伯(Henry Percy, Earl of Northumberland)の反逆を屈服させたように、ヘンリー五世もまた迅速に処理し、ケンブリッジ伯を屈服させている。ヘンリー五世は父王ヘンリー四世の篡奪と統治の直接的所産である。「ヘンリー五世」においては、シェイクスピアは心からの讃辞をもって、ヘンリー五世のイギリス王位就任を述べている。先ず第一に強調されている点は、有能な国王とは内乱を引き起さぬ政治的手腕がなければならないことである。そしてさらにその政治的手腕はその正当な相統権による王位継承よりもはるかに重要であることが示されている。

「ヘンリー四世(第一部・第二部)」において、シェイクスピアはヘンリー五世(ハル王子)として出現する偉大な国王の生成過程を示してくれた。リチャード二世に対しては、彼の公徳心の欠如を指摘している。ヘンリー五世のみが理想君主として描き出されている。すなわちあらゆる美德を有する国王となっているのである。「ヘンリー四世(第一部・第二部)」はすでに触れたように、「エドワード三世」劇の「教育」という主題性を持ち、如何にして理想君主へ成長してゆくかという過程を描いた戯曲なのである。「教育」という主題性を完成させるために、シェイクスピアは伝統的に用いられている劇的構成、すなわち「すてきな娼婦」(Nice Wonton)、『淫らなユヴェンス」(Lusty Juventus)、『智慧と科学」(Wit and Science)などの劇作品にみられる道徳劇の方式を取り入れているのである。

王子ハルが国王になるためには戦術と平和政策とを学びとらなければならない。「ヘンリー四世」(第一部)において、王子ハルは一兵卒として教育されており、「ヘンリー四世」(第二部)においては政治家として教育されている。

史実に従ってヘンリー五世をみた場合、彼は青年時代に放蕩無頼の生活を送ったといわれている。テト・リヴィオ(Tito Livio of Ferrara)の「ヘンリー五世の生涯」(Vita Henrici Quinti: 1437)やロバート・ファヤン(Robert Fabyan)の「年代記」(Chronicle: 1516)にそのことが記されている<sup>(8)</sup>。また「ヘンリー五世の大勝利」にも放蕩無頼のハル王子が描き出されている。こうした一連の史実から、シェイクスピアはヘンリー五世(ハル王子)の一面をとらえたことは明らかであろう。ハル王子の放蕩無頼の生活は、ちょうど中世の奇蹟劇や道徳劇にみられる英雄が悪漢に屈服するのはいつも居酒屋においてであるように、ボア・ヘッド(Boar Head)と呼ばれる居酒屋を舞台に描き出されてゆくので

ある。しかしシェイクスピアはつねにハル王子が改心するということを観客に意識させながら描いてゆくのである。最初の「居酒屋の場」(二幕二場)におけるハル王子の独白は最も重要な劇的機能といえるであろう。

I know you all, and will awhile uphold  
The unyoked humour of your idleness. Yet herein will I imitate the sun,  
Who doth permit the base contagious clouds  
To smother up his beauty from the world,  
That when he please again to be himself,  
Being wanted he may be more wonder'd at,  
By breaking through the foul and ugly mists  
Of vapours that did seem to strangle him.

If all the year were playing holidays,  
To sport would be as tedious as to work;  
But when they seldom come, they wish'd for  
come, And nothing pleaseth but rare accidents:  
So, when this loose behaviour I throw off,  
And pay the debt I never promised,  
By how much better than my word I am,  
By so much shall I falsify men's hopes,  
And like bright metal on a sullen ground,  
My reformation, glittering o'er my fault,  
Shall show more goodly, and attract more eyes,  
Than that which hath no foil to set it  
off. I'll so offend, to make offence a skill,  
Redeeming time when men think least I will. (I. ii, 187~209)

この独白は友を欺く偽善的計画を意味するものではなく、これから起るであろうことを観客に示すドラマテック・コンヴェンションなのである。「ヘンリー四世(第一部・第二部)」にはハル王子の二回の「改心」が示されている。第一の改心は「ヘンリー四世」(第一部)の終幕においてであり、第二の改心は「ヘンリー四世」(第二部)の終幕においてであった。改心についてのシェイクスピアの意図は歴史劇における教訓的要素というものが、実際の史書よりもはるかに重要であるということを感じさせるところにあるといえよう。この改心という主題性は文学上にみられる作用というよりは、むしろ宗教的なそれに近い。シェイクスピアはこの二回の改心が理想君主の生成過程に不可欠のものであることを示しているのである。ハル王子は二派の仲間にはさまれて徳行の選択に直面させられる。一方はハル王子の国王的徳行を阻害し、国王就任を阻止しようとする力であり、その代表的人物はフォールスターフである。他方は彼に国王的徳行を身につけさせ、国王就任を全面的に支持しようとする力であり、その代表者は最高裁判所長官である。ハル王子は「ヘンリー四世」(第一部)の終幕において、フォールスターフを避け、「ヘンリー四世」(第二部)では完全にフォールスターフを追放してしまう。この追放はシェイクスピアの根本的考案の本質的なものの一つであるように考えられる。しかしフォールスターフはシェイクスピアが創造し得た最もすばらしい喜劇的人物でもあった。このフォールスターフは

歴史劇の教訓的目的を成し遂げるための手段として考案された人物である。

ハル王子の「教育」という主題性からみた場合、フォールスターフは破壊的要素として、徳行を阻止しようとする誘い手である。道德劇にみられるヴァイス（悪役）が観客を引きつけるように、フォールスターフも極めて魅力的である。フォールスターフは人生の豊かさ、多様さ、そしてまた人間の共通した脆さ、欠点―愛慾、貪慾―などを兼ね備えている。彼にとっては義務も名誉も貴族的な抽象にしかすぎず、そのために自分の生命を犠牲にすることを好まない人物なのである。

フォールスターフ追放にあたって、ハル王子は自己の人間的な一面をも追放してしまったという解釈もある。しかしシェイクスピアの描く歴史劇の不変の主題は、国王の在り方である。国王が神の代理者であるならば、大きな代償を払わなければならないのは当然のことであるといえる。フォールスターフ追放において、先ず第一にハル王子は日常茶飯事を捨て去らなければならない。国王は謹厳な責務者でなければならない。ハル王子は道德劇にみられるような英雄とは異っている。そのためにフォールスターフによって欺かれるということはない。ハル王子には威厳があり、来るべき時には自己の為すべき行動を自覚している。両者が一緒にいるときでも、ハル王子はすでにフォールスターフを避けていることがわかる。ハル王子はフォールスターフ追放を世に確証づける時機を待ち望んでいるだけのことである。国王という荷は重く、重大であり、しばらくはフォールスターフの仲間に加わってその重荷を避けようとしているが、真にそれを避けているのではない。来るべき時には国王という重荷を背負う決意が示されている。ハル王子が国王になれば、イギリス国内には必ず内乱が起るだろうというフォールスターフの予想は、完全に覆されてしまう。

フォールスターフの仲間に加わるハル王子は決して無為の日々を送っているのではない。この仲間に加わることによって、庶民一般を知ることができ、彼が王座にいた時には庶民の根強い支持が得られることを感知していたからである。

I have sounded the very base-string of humility. Sirrah, I am sworn brother to a leash of drawers, and can call them all by their christen names, as Tom, Dick, and Francis. They take it already upon their salvation, that though I be but Prince of Wales, yet I am the king of Courtesy, and tell me flatly I am no proud Jack like Falstaff, but a Corinthian, a lad of mettle, a good boy, by the Lord, so they call me, and when I am king of England, I shall command all the good lads of Eastcheap...To

conclude, I am so good a proficient in one quarter of an hour, that I can drink with any thinker in his own language during my life. (II. IV, 5~20)

アーシングコート戦場におけるヘンリー五世(ハル王子)が、その前夜自ら兵士の野営場を訪れながら、兵士一人一人に戦士士気を高め、さらにまた一兵卒に至るまで国王への忠誠心を植えつけ一糸乱れぬ団結を可能ならしめたのも、庶民の心をよくとらえていたためなのである。

フォールスターフを描くにあたって、シェイクスピアは「ヘンリー五世の大勝利」に登場しているオールドカースル(Oldcastle)という人物から暗示を得ているように思われる。「ヘンリー四世」の初版本に肥った騎士の名がオールドカースルであった。この登場人物の名が歴史実在のコーバム卿ジョン・オールドカースル(Lord Cobham, John Oldcastle)に一致している。史実によれば、コーバム卿ジョン・オールドカースルはヘンリー五世によって火刑に処せられたローランド派の殉教者であった。シェイクスピアや同時代の劇作家たちは、その当時コーバム卿を戯画化する動機となったこと、そしてこの「ヘンリー四世」劇がコーバム家に非難されたためその名をフォールスターフに変えた<sup>(10)</sup>ということはほぼ確からしい。ローランド派はエリザベス時代のピューリタンとも密接な関係があった。当時のピューリタンを嘲笑するために、シェイクスピアの描いたフォールスターフには宗教的偽善者の一要素が加わっているのだという解釈<sup>(11)</sup>もある。またこのようなローランド派を戯画化することに対して、シェイクスピアはフォールスターフに他のさまざまな要素を加え、肉付けしたのだと言われている。しかしフォールスターフの劇的機能として最も重要なことは、道徳劇のもつヴァイスの伝統を受け継いでいるということである。

「ヘンリー四世」(第一部)において、ハル王子は二つの重大な教訓を学ばなければならない。第一は王族としての生れを自覚すること、第二は戦場において勇敢な騎士となることである。フォールスターフはこの二大教訓と相対立する側に立っている。フォールスターフは怠惰で臆病の象徴でもある。フォールスターフに対立するのはハル王子であり、ランカスターのジョン(John of Lancaster)であり、ウェストモアランド伯(Earl of Westmoreland)やウォルター・ブラント(Sir Walter Blunt)の貴族たちである。ハル王子が改心の第一歩を踏み出し、騎士的美徳を発揮するのはソルスベリ戦場においてであった。

I saw young Harry with his heaven on, His cushions on his thighs, gallantly arm'd, Rise from the ground like feather'd Mercury, And vaulted with such ease into his seat, As if an angel dropp'd down from the clouds, To turn and wind a fiery Pegasus And

シェイクスピアは「ヘンリー四世」(第一部)において、騎士の剛勇さを意味づけるために多くの関心を示しているように思われる。この主題を発展させるために、シェイクスピアはハル王子に匹敵し得るもう一人の勇者、ホットスパー(Hotspur)を設定したのである。ホットスパーは名門の出身でありその責任をよく自覚している。しかしホットスパーが悲劇的人物として設定されている最大の理由は、彼の根本の美德、すなわち「節制」(temperance)が欠如しているところにある。シェイクスピアの意図する真の勇者とは両極の中間に位する「中庸」(mean)でなければならない。一方はフォールスターフの臆病があり、他方はホットスパーの無謀さがある。両極はともにハル王子によってのみ避けられなければならない。ホットスパーは真の勇者ではなく、彼の名誉欲は単に個人的名声の利己的目的のためのものであった。真の名誉とはハル王子が好敵手ホットスパーを打ち倒したとき、ハル王子が彼に対して心からの哀悼の意を表したこと、さらにフォールスターフに対してはその勲功を譲るという雅量さから生れ出るものなのである。ハル王子にとって真の名誉とは名声や栄光ではなく、王子としての義務を果すことなのである。ソルスベリ戦場においてハル王子の行為は、決して利己的目的ではなく、ただ国へ奉仕するためのものであった。ホットスパーは理想的政治家に達するにはほど遠い人間といえる。有能な政治家がつねに意識していなければならない社会と個人との複合的關係が、彼には少しも理解されていないのである。そのことはモティーマ(Motimer)やグレンドワ(Owen Glendower)たちとの關係に明示されている。ある意味ではホットスパーの立場はちょうどフォールスターフと同様に、イギリスを破滅させようとする誘い手なのかも知れない。ハル王子は騎士的武勇の世界を表わし、戦場では没我的雅量を示している。「ヘンリー四世」(第二部)においては、ハル王子の平和政策へのひたむきな努力が示されてゆくのである。

## 五

「ヘンリー四世」(第二部)においては、シェイクスピアは「ヘンリー四世」(第一部)で行ったと同様に象徴的な道德劇のパターンを用いている。それというのもハル王子が再び教育されなければならないためであり、フォールスターフの世界から脱皮するためでもある。フォールスターフに対するハル王子の軽視の態度は、「ヘンリー四世」(第一部)にみられるときよりも、「第二部」においては一層激しく、全く無視した態

度をとっている。「ヘンリー四世」(第一部・第二部)におけるハル王子の改心は、歴史的事実の説明というよりは教訓的目的のための象徴的パターンとして提示されているものなのである。「ヘンリー四世」(第二部)におけるフォールスターフは「第一部」と同様に誘い手の役割であるが、「第一部」よりははるかに魅力の乏しい人物となっている。彼の怠惰、臆病につけ加えられて、内乱の無秩序、悪政という最も嫌悪すべき面が象徴されているからである。

「ヘンリー四世」(第二部)において、フォールスターフに相対立するのは最高裁判所長官である。最高裁判所長官は謹厳であり、公正であり、そして秩序の象徴でもある。したがって「ヘンリー四世」(第二部)の政治的テーマは、フォールスターフと最高裁判所長官の対立のうちに展開されてゆくと言っても過言ではない。悪魔が神を恐れるように、フォールスターフの恐れている人物は最高裁判所長官である。フォールスターフはハル王子の国王就任を耳にしたとき、彼は自分の敵である最高裁判所長官の追放を心に描いて喜んでいる。

Boot, boot, Master Shallow! I know the young king is sick for me. Let us take any man's horses; the laws of England are at my commandment. Blessed are they that have been my friends; and woe to my lord chief justice! (V. iii, 137~141)

また同時に、他方の最高裁判所長官は新王就任の噂を聞き、フォールスターフとは逆に自分の立場に不安を抱いている。

Sweet princes, what I did, I did in honour, Led by the impartial conduct of my soul; And never shall you see that I will beg A ragged and forestaled remission. If truth and upright innocence fail me, I'll to the king my master that is dead, And tell him who hath sent me after him. (V. ii, 35~41)

フォールスターフと最高裁判所長官との対立は、「ヘンリー四世」(第二部)の核心でもあるといえよう。すべての人は新王ハル(ヘンリー五世)がフォールスターフを選ぶであろうと予想していたが、しかし新王は最高裁判所長官を選び、フォールスターフを追放し、そしてイギリスの平和を念願するのである。

この「ヘンリー四世」劇の背景には、ハル王子が強盗をし、宮廷に呼び出されたとき、彼が最高裁判所長官を殴りつけたため入獄させられたという古い伝統が秘められている。

「ヘンリー五世の大勝利」には、この事件が詳細に描き出されているけれども、シェイクスピアは「ヘンリー四世」劇にその事件をほんの僅



かしと言及していない。シェイクスピアがハル王子と最高裁判所長官との関係を観客に印象づけようとしたことだけは確かであろう。ハル王子は最初フォールスターフの立場から出発した。法律や秩序とは相対立する世界から出発したのである。しかし政治における公正、秩序への彼の姿勢は最高裁判所長官との和解の場になつてゐた。最高裁判所長官は次のやうに答へるのである。

I then did use the person of your father ; The image of his power lay then in me : And, in the administration of his law, While I was busy for the commonwealth, Your highness pleased to forget my place, The majesty and power of law and justice, The image of the king whom I presented, And struck me in my very seat of judgment ; Whereon, as an offender to your father, I gave bold way to my authority And did commit you. If the deed were ill, Be you contented, wearing now the garland, To have a son set your decrees at naught, To pluck down justice from your awful bench, To trip the course of law and blunt the sword That guards the peace and safety of your person ; Nay, more, to spurn at your most royal image And mock your workings in a second body. Question your royal thoughts, make the case yours ; Be now the father and propose a son, Hear your own dignity so much profaned, See your most dreadful laws so loosely slighted, Behold yourself so by a son disdain'd ; And then imagine me taking your part And in your power soft silencing your son : After this cold consideration, sentence me ; And, as you are a king, speak in your state What I have done that misbecame my place, My person, or my liege's sovereignty. (V. II, 73~101)

いまだにわづらひて候中へハル王子五郎 (ハル王子) は父の代々の御座の御座なり。

You are right, justice, and you weigh this well ; Therefore still bear the balance and the sword : And I do wish your honours may increase, Till you do live to see a son of mine Offend you and obey you, as I did. So shall I live to speak my father's words : 'Happy am I, that have a man so bold, That dares do justice on my proper son ; And not less happy, having such a son, That would deliver up his greatness so Into the hands of justice.' You did commit me : For which, I do commit into your hand The unstained sword that you have used to bear ; With this remembrance, that you use the same With the like bold, just and impartial spirit As you have done 'gainst me. There is my hand. You shall be as a father to my youth : My voice shall sound

as you do prompt mine ear, And I will stoop and humble my intents To your well-practised wise directions. (V. ii, 102~21)

この象徴的な和解の場において、シェイクスピアは「ヘンリー四世」(第一部)の最も重要な政治的主題を述べているのである。ハル王子に対する政治学<sup>(11)</sup>の教育は先ず第一に公明正大に判断することを指針としている。ハル王子は正しい教育の過程を受け、そして正しい選択をしたのである。

「ヘンリー四世」(第一部)のホットスパーに匹敵し得る劇的機能を満す性格があるとすれば、それはランカスターのジョンであるかも知れない。ちょうどホットスパーが戦場において誠らしい勇者であったように、ジョンも政治の面で誠らしい善徳の側にいるのである。真の騎士が没我的雅量<sup>(12)</sup>を内包しているように、正しい政治は名誉の上に築かれるものでなければならない。ジョンの欠如はゴルツリ森における反逆軍に対する彼の行為からうかがわれる。反逆軍に対する彼の懲罪は法律上認められ得る最も苛酷な処置方法であった。これに反して法律の盲点を突き、法律を無視して行動するのがフォールスターフであった。ハル王子はこの両極端な行動を避け、公正な中庸の態度をとる。

ハル王子はフォールスターフの無秩序な世界を脱皮し、また同時にランカスターのジョンや父王ヘンリー四世によって示された不名誉な便宜主義に毒されることもない。そしてついに最高裁判所長官によって象徴されている公正な世界、秩序ある世界を確認し、理想君主へと成長してゆくのである。理想君主が如何にして教育されるかというこの叙述が「ヘンリー四世」(第一部・第二部)におけるシェイクスピアの最大の関心であったし、また最も重要な主題だったのである。

「ヘンリー五世」(Henry V)の第一の目的は「リチャード二世」劇をもって始められた四部作を完結することにあった。シェイクスピアは「ヘンリー四世」(第一部)において騎士の美徳を、そして「ヘンリー四世」(第二部)においては公徳を例証することによって、あらゆるキリスト教国王のなかで亀鑑を示そうとしたのかも知れない。「ヘンリー五世」の初幕においては、先ず第一にヘンリー五世の公徳が明示されている。ヘンリー五世は理性によって自己の感情を抑制することのできるキリスト教国王として描かれている。またヘンリー五世の軍事的業績についてみた場合、彼は観客の愛国的感情を最も効果的に高めることに成功しているといえよう。愛国主義は歴史劇のもつ重要な要素である。<sup>(12)</sup> シェイクスピアが「ヘンリー五世」を執筆している際、当時の軍隊の在り方を意識していたことは明らかである。<sup>(13)</sup> どういう状態のもとで国王は戦争をするか、兵士に対する国王の責任は何か、国王に対する兵士たちの責任は何であるか、という根本問題を提示しているのである。

ちょうどマーロウが「タンバレン大王」(Tamburlain the Great: 1588)の主題を英雄劇として描き出したように、シェイクスピアも勇猛果敢な騎士としての国王を描き出すために、「ヘンリー五世」を英雄劇の手法で描き出してゆくのである。「ヘンリー五世」は戦争宣言によって開幕され、着実に進撃しつづけながら国王の栄光がますます高まり、平和をもつて終幕する戯曲なのである。この点、「ヘンリー五世」はシェイクスピアのキリスト教的「タンバレン」と呼ぶことができるかも知れない。しかしヘンリー五世は残忍よりは慈悲を、神に反逆するよりは神に服従するという態度である。ヘンリー五世の宗教的態度は敬虔そのものである。理想君主には宗教心がなければならぬ。ヘンリー五世はアーシンコートでの決戦で勝を得たとき、心から神に感謝をする。その時の言葉は多少異様な感じを与えるものではあるが、その言葉はシェイクスピアがヘンリー五世の宗教的態度を強調するための考案であったと考えるべきであらう。

国内政策において、ヘンリー五世が最も重要視していたことは謀叛を阻止することであった。国内秩序の維持は国王の第一の義務である。シェイクスピアは「ヘンリー四世」劇では国王の有能さと関連づけて、「リチャード二世」の無能さを対照させた。そして「ヘンリー五世」においても、再びこの主題を取り上げている。それはケンブリッジ伯の謀叛である。もちろんエリザベス時代の観客は謀叛を引き起したケンブリッジ伯の理由をヨーク家の王位正統権と結びつけている作者の意図に気づいていた。このサブ・プロットはリチャード二世の退位とヘンリー四世およびその子ヘンリー五世の不当な王位継承問題に関して、オーマールとパーシーの謀叛と結びつけられている。この反逆はすぐに鎮圧されてしまうことは言うまでもないが、そこにはランカスター家の王位継承権の正統性が強調されていることに注目すべきである。ランカスター家に対立する徒党はすべて謀叛人として取り扱われているようにも考えられる。シェイクスピアもエリザベス時代の忠誠な国民であるならば、当然のこととしてエリザベス女王の祖先であるランカスター家の諸王を称讃しなければならなかったであらう。

シェイクスピアは四部作において多くの主題を取り扱ってきた。このことはルネッサンスの多くの歴史家たちが意図していた歴史的目的をシェイクスピアが代弁しているともいえるのである。しかしシェイクスピアの最大の意図は理想的君主像を描き出すことであり、その亀鑑を示すことであった。四部作は共にエリザベス時代の諸問題を反映しており、そのなかで最も重大問題はエリザベス女王の王位後継者のそれであった。

この四部作は首尾一貫したユニットで構成されていることは言うまでもない。そしてその四部作の統一は芸術的形態とか劇的技巧のそれでは

なく、むしろ歴史的目的の統一であるといいたい。すでに述べてきたように、「リチャード二世」においてはマロウの「エドワード二世」の影響がみられ、また「ウッドストック」の道德劇的要素も含まれている。「ヘンリー四世」(第一部・第二部)においては、「エドワード三世」にみられるように、教育を主題とした劇となり、伝統的な道德劇の技巧もつけ加えられている。「ヘンリー五世」はマロウの「タンバレイン大王」にみられるように英雄劇として設定されている。四部作にみられるさまざまな芸術的形態や劇的技巧は、ともに四部作という大きな体系に包まれ、そのなかにおいてそれぞれの目的を達成させているのである。言い換えれば、それらは退位の悲劇、教育過程、理想君主の輝かしい出現という大主題を支えている諸要素にすぎないのである。

シェイクスピアの歴史劇への功績はその規模においても、またその多様性においてもエリザベス時代の劇作家を圧倒している。しかし初期の劇作家による業績がなかったならば、恐らくシェイクスピアの優れた四部作も生れなかったであろう。その意味でシェイクスピアの四部作はエリザベス時代における歴史劇の集大成ともいえるのである。

## 註

- (1) E. K. Chambers: William Shakespeare I, pp. 270~1.
- (2) E. M. W. Tillyard: Shakespeare's History Plays, pp. 234~314.
- (3) Matthew W. Black: The Sources of Shakespeare's Richard II, pp. 199~216.
- (4) I. Ribner: The English History Play in the age of Shakespeare, p. 152.
- (5) E. M. W. Tillyard: The Elizabethan World Picture, p. 7.
- (6) Lily B. Campbell: Shakespeare's Histories, p. 211.
- (7) Dover Wilson: Richard II, Introduction, pp. 19~22.
- (8) I. Ribner: The English History Play in the age of Shakespeare, p. 169.
- (9) Dover Wilson: Fortunes of Falstaff, p. 25.
- (10) I. Ribner: The English History Play in the age of Shakespeare, p. 173.
- (11) Dover Wilson: Fortunes of Falstaff, pp. 32~35.
- (12) 拙論「エリザベス時代における歴史劇」大正大学研究紀要「第五四輯」参照。
- (13) Lily B. Campbell: Shakespeare's Histories, pp. 225~305.